日本・ギリシャ外交関係樹立110周年記念企画展

ラフカディオ・ハーンとギリシャ

もうひとつのルーツと受け継がれる精神性

2009年4月25日（土）—2010年3月31日（水）

主催：小泉八雲記念館（NPO法人松江ツーリズム研究会）

今年は、日本とギリシャの外交関係樹立110周年にあたることから、ギリシャとの文化交流を深めるために企画展を開催します。展示品は、2008年9月に小泉凡がギリシャ訪問の際に撮影した、ハーンの母ローザの生誕地キシラ島やハーンの生誕地レフカダの写真と、ギリシャでハーンを介した日本との文化交流の実現に奔走しているタキス・エフスタシウ氏が2008年11月に松浦正敬松江市長に寄贈したギリシャの美術品を展示・公開します。すなわちこの展示は、ハーンがギリシャから賜ったと告白する精神性が後世のアーティストへどのように受け継がれていったのか、また造形芸術によってハーンの精神性や文化背景を表現することの可能性を示唆するもので、新しいスタイルによるギリシャとの文化交流の布石になると考えています。

問い合せ先：小泉八雲記念館（Phone: 0852-21-2147）

オープニング・セレモニー：4月25日（土）

［**別添資料**］企画展あいさつ文、解説、主要展示品

企画展あいさつ文

ラフカディオ・ハーンとギリシャ

もうひとつのルーツと受け継がれる精神性

パトリック・ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は1850年6月27日にギリシャ・イオニア諸島のレフカダ島に生を享け、父チャールズの実家のあるアイルランド・ダブリンに移るまでの約2年間をギリシャで送りました。ミドルネームの「ラフカディオ」はこの地名に因んでいます。また、レフカダと松江とは、ふしぎにも「潟」の風景としての共通点があります。

ハーンは、ギリシャ人の母、ローザ・カシマチ（1823-1882）と4歳の時に生き別れて以来、2度と会うことはありませんでした。しかし、母への強い愛惜の念とともに、ギリシャ人としてのアイデンティティを誇り高く持ち続けました。古代ギリシャの神々が奔放に活躍する多神教世界や小動物にも魂を認めるアニミズム的感情に、日本文化の共通性を重ね、自分の心の中に理想郷としてのギリシャ像を思い描いていったのです。

2009年は日本とギリシャの外交関係樹立110周年にあたり、ささやかな企画展を行うことにしました。2008年9月のギリシャ訪問時に撮影したハーンゆかりの地、とりわけキシラ島やレフカダ島の写真を中心にご紹介します。ハーンの母ローザの生地キシラ島では、島民が誇りを持って語り伝える、評伝の言説とは異なるローザの物語や、島民のハーンへの愛情に満ちた関心に心を揺さぶられ、自分のギリシャのルーツがここにあることを確信しました。また、私たちをギリシャの旅に誘ったタキス・エフスタシウ氏が、2008年11月に来松された際に松浦正敬松江市長に寄贈したギリシャの美術品を同時に展示公開することにしました。その中には、ハーンをこよなく愛した現代ギリシャを代表する画家テオドロス・スタモス（1922-1997）の作品も含まれています。

すなわちこの展示は、ハーンがギリシャから賜ったと告白する精神性が後世のアーティストへどのように受け継がれていったのか、また造形芸術によってハーンの精神性や文化背景を表現することの可能性を示唆するもので、新しいスタイルによるギリシャとの文化交流の布石になると考えています。

小泉八雲曾孫　**小泉 凡**

1——キシラ島

ラフカディオ・ハーンの母、ローザ・アントニア・カシマチは1823年、キシラ島の中心地キシラに生まれた。1848年4月、ローザの生家の眼前に聳えるカプサリ城塞に、英国陸軍第45ノッティンガム歩兵連隊に所属する軍医補チャールズ・ブッシュ・ハーンが赴任してきた。チャールズは城塞内の教会に熱心に通うローザとまもなく恋に落ちた。チャールズ30歳、ローザ25歳だった。ふたりの結婚に反対したローザの兄デミトリオッシュが、チャールズをナイフで刺したというエピソードはハーン自身が語っているが、真実のほどはわからない。1849年6月、チャールズのレフカダへの転任に伴い、ローザもチャールズとともに島を離れた。

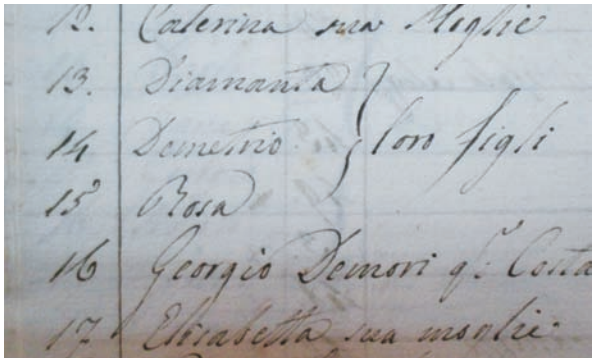
ローザは、息子ラフカディオが4歳のころ、彼をダブリンに残したまま不安定な精神状態となってキシラ島に帰ってきた。そしてジョン・カバリーニというイタリア・ジェノバにルーツをもつ男性と再婚した。その息子アンジェロは、後に人々から敬愛される聖職者となり、今もキシラ島にはアンジェロから洗礼を授かったことを誇りとする老人たちが生存している。評伝によれば、概してローザは無学文盲で感情に走りやすい女性だとされているが、島の人々の伝承では、ローザの家のすぐ下に学校がありローザは非常にハイレベルの教育を受けていた、また、つねにダブリンに残してきたラフカディオのことを気遣っていたと伝えている。なお、ローザは1882年にコルフ島で亡くなっている。

キシラ島はペロポネソス半島南東端のイオニア海・エーゲ海・クレタ海の交わる海上に浮かぶ人口3000人の島。美と愛の女神アフロディーテが泡の中から誕生し、風によってこのキシラ島に運ばれたという名高い物語がある。中世以降だけでもトルコ・ヴェネツィア・フランス・ロシア・イギリスの支配を受けた。

2——レフカダ島

ラフカディオ・ハーンの父チャールズ・ブッシュ・ハーンは、キシラ島からローザをともなって、1849年6月にレフカダに移り、翌年2月まで滞在した。チャールズがアイルランドに召還されてから4ヶ月後の1850年6月27日、パトリック・ラフカディオ・ハーンはレフカダ島の中心地レフカダで生まれた。ミドルネームの「ラフカディオ」は「レフカダっ子」という意味をもつ。聖パラスケヴィ教会(ギリシャ正教)で幼児洗礼を受けるが、「パラスケヴィ」は目を司る神で、目を負傷したハーンがのちに薬師信仰に共感したことと不思議にも通じ合う。同年8月にはラフカディオの兄、ロバートが熱病で死亡し、同教会に埋葬された。ローザはひとり幼子をかかえて日当たりの悪い路地裏の家で不安な日々を送っていたことが想像される。ハーンとローザは1852年8月、パリから迎えにきた叔父リチャードに伴われ、マルタ島経由でチャールズ

ローザの生家。今もそのまま残っているが、中は改装中だった。



キシラ島の文書館に残る当時の住民台帳。ローザ(No.15)と二人の兄弟(ビアマンタ、デミトリオッシュ)の名前がみえる。

ローザの墓。1882年に亡くなったローザが、再婚者の家族とともにここに眠っている。

の実家のあるアイルランド・ダブリンに向かった。

レフカダと松江は、堤防や砂州によって外海から隔たれた「潟」の風景としての共通点がある。いずれも西側に海があるため、靄が立ち込めたような光景も共通している。ハーンが宍道湖の風景を愛したことは記憶以前の原風景としてのレフカダの風景を重ねたのだろうか。

レフカダはギリシャ西部イオニア諸島の中で4番目に大きな島。堤防道路と橋によって本土とつながっている。人口は22,879人（2005年）。レフカダも他のイオニア諸島と同様に、19世紀中ごろまでは、マケドニア・ヴェネツィア・フランス・ロシア・イギリスなどから支配を受けた。

3――受け継がれるギリシャの精神性

ハーンはよく子どもの頃、ノートの余白に筋肉の絵を描いていたという。そして、その後も古代ギリシャ彫刻にみる並外れた肉体美について永く自問してきた節がある。ハーンが出した答えは、羞恥心がない時代だからこそ「愛の直観を通して、彼らは人体についての神々しい幾何学的観念の秘訣を発見したのです」（チェンバレン宛書簡）というものだった。つまりギリシャ芸術はキリスト教的な倫理観にとらわれないからこそ美しいと考えた。後年、ハーンはみずからも、10キロのダンベルで体を鍛えることを怠らなかった。

ギリシャへの愛着と憧れは肉体美だけではなかった。弟ジャームズに宛てた手紙に、自分の長所はあの浅黒い肌をしたギリシャ人種の魂から受け継いだものだと書いている。「私が正しいことを愛し、間違ったことを憎み、美と真実を崇め、男女の別なく人を信じられるのも、芸術的なものへの感受性に恵まれ」たことも。つまり、自らが自信をもって貫いてきた価値観をギリシャからの賜り物と考えている。

後にハーンが「夏の日の夢」に書いた「ある場所と、ある不思議な時の記憶」「小さな王国」「神さまのようなその人」が、原風景のギリシャと母のイメージを重ねたものであるとすれば、ギリシャへの憧憬は母への愛惜の念がその中核をなしていたといえるかもしれない。松江の大雄寺に伝わる子育て幽霊の話を「母の愛は死よりも強し」と言い換えて結んだことからも母への強い想いが伝わる。

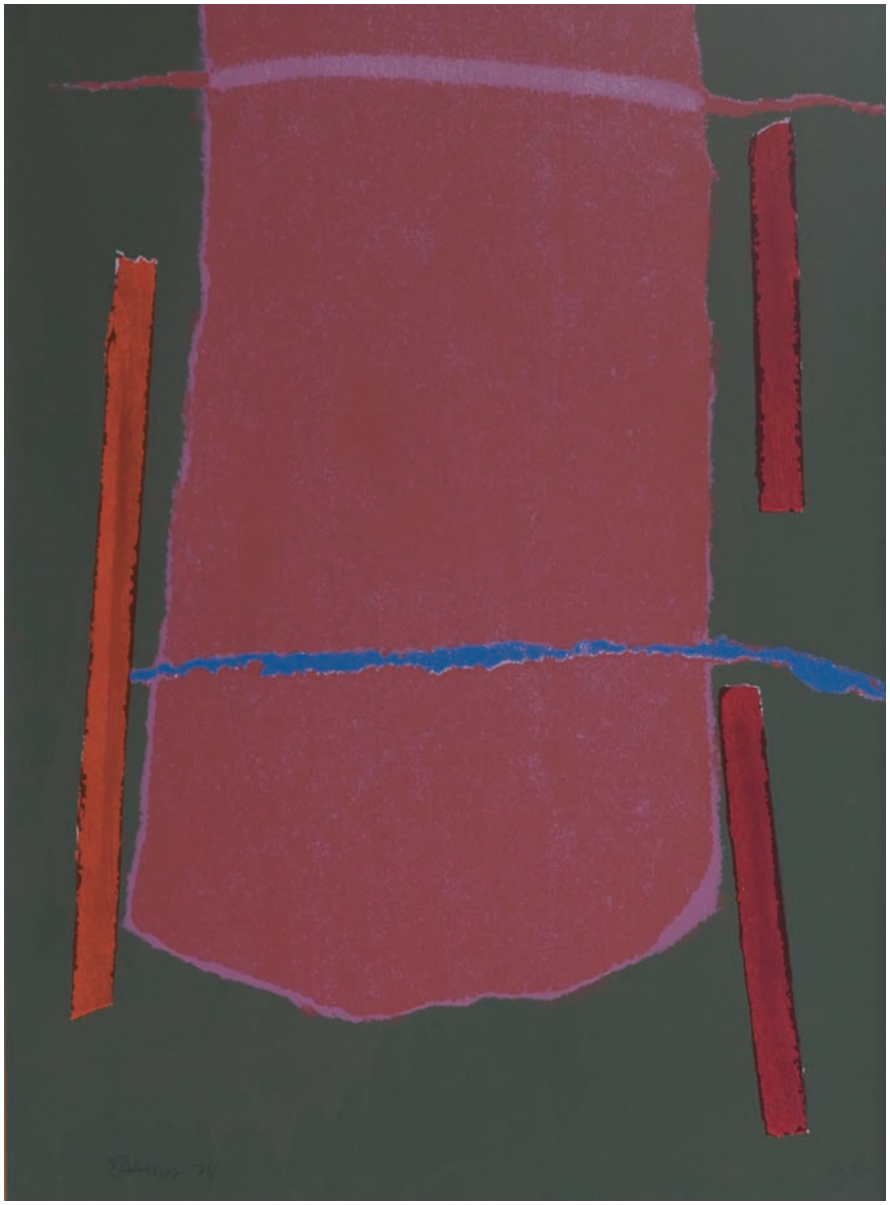
時を経て、ハーンのギリシャへの想いが、代表的な現代ギリシャ画家テオドロス・スタモスの琴線を震わせ、また、スタモスの親友タキス・エフスタシウ氏がこれに呼応するように、ハーンを介したギリシャと日本の文化交流の実現に奔走している。アテネのアメリカン・カレッジのハーンコレクションや今後展開されるギリシャ現代アーティストらによるハーンをテーマとする造形芸術のエキジビション、野田正明氏によるハーンの心を抽象化したモニュメントの作成など、ハーンがもつギリシャの精神性の継承と再評価が行われつつある。

上：ハーンの生家がある通り、「ラフカディオ・ハーン・ストリート」。
右：ハーン・ストリートのサイン。

参考文献

O.Wフロスト『若き日のラフカディオ・ハーン』
西野影四郎『小泉八雲とヨーロッパ』
工藤美代子『聖霊の島――ラフカディオ・ハーンの生涯［ヨーロッパ編］』
『ラフカディオ・ハーン著作集』第15巻
『小泉八雲事典』
KYTHIRA (Comprete and Up-to-date Travel Guide)
「夏の日の夢」

主要展示品



テオドロス・スタモス

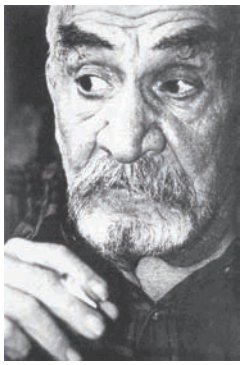
インフィニティ・フィールド　レフカダ・シリーズ

〈オリジナル：シルクスクリーン、1974年〉

1974年にアテネ美術館が彼の個展の開催を記念して限定プリントしたもののうちの1枚。

タキス・エフスタシウ氏寄贈

Theodoros Stamos
Infinity Field Lefkada Series (Original: Silk screen on paper 1974)
98(H)×78(W)



テオドロス・スタモス（1922-1997）

Theodoros Stamos (1922-1997)

1922年ギリシャ系アメリカ人としてニューヨークに生まれる。第一世代の最も若い抽象表現主義の画家のひとりで、1940年代～1950年代をニューヨークで活躍した。1936年にアメリカン・アーティスト・カレッジで学び、1958年～1975年までブラックマウンテン・カレッジなどで教えた。1970年代後半に多くの作品をギリシャ国立美術館に寄贈した。また、彼がなくなった翌年、同美術館で回顧展が開催された。晩年をたびたび父親の故郷ギリシャ・レフカダで過ごし、今もレフカダに眠っている。

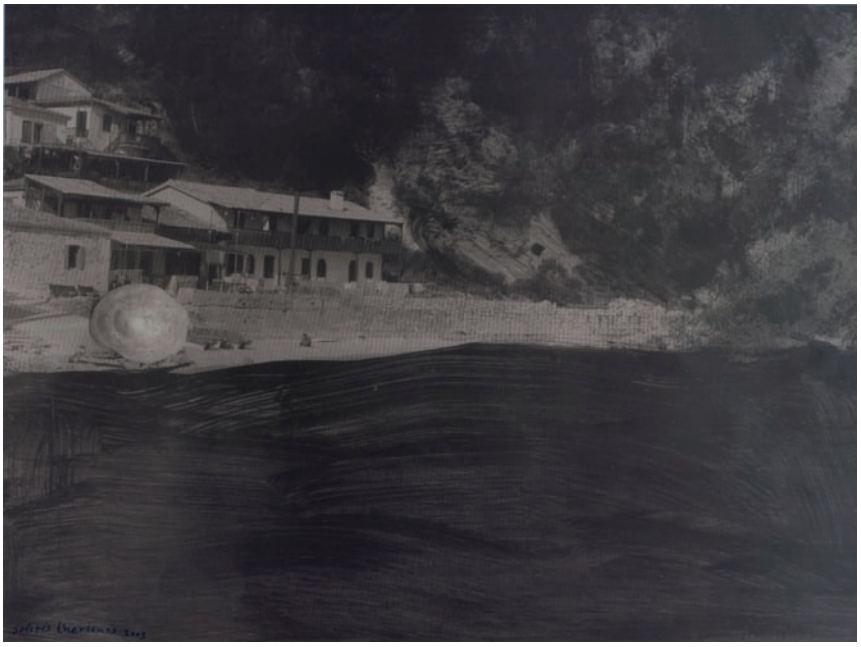
ソテイリス・テリアノス

夢

レフカダ出身のアーティスト、テリアノスが2003年8月の地震直後のサン・ニキタスを表現した作品。

タキス・エフスタシウ氏寄贈

Sotiris Therianos
The Dream
After earthquake 14 Aug. 2003
30.4(H)×40(W)



ジョン・ヘニング

パルテノン神殿、石膏の装飾壁〈1819年〉

当時、イギリスの外交官だったエルギン伯爵トーマス・ブルースが、パルテノン神殿の貴重な彫刻を国に持ち帰った。ヘニングの作品は、現在大英博物館に展示してあるそのエルギンマーブルのミニチュアの複製としてよく知られている。ヘニングは、パルテノンの装飾壁の美しさに感銘を受け、そのレプリカを作る許可を得た。オリジナルは、メトペスと呼ばれ、パルテノン神殿の外壁に彫刻されており、フィディアス(BC480-BC430)によってデザインされた。

タキス・エフスタシウ氏寄贈

John Henning
Plaque of the Parthenon Frieze Plaster (1819)
40.8(H)×29(W)

Special Exhibition of Lafcadio Hearn Memorial Museum

Landscape of Kythira, where Hearn's mother, Rosa was born.
It is a village with a population of 600.

110th Anniversary Exhibition of
the Establishment of Diplomatic Relations
between Japan and Greece

Lafcadio Hearn and Greece

Other Roots and Inherited Spirit

April 25, 2009–March 31, 2010
Lafcadio Hearn Memorial Museum
Matsue, Japan

Opening Ceremony: April 25, 2009

Lafcadio Hearn Memorial Museum
Phone: +81 (0)852 21 2147 E-mail: yakumo-k@web-sanin.co.jp
http://www.matsue-tourism.or.jp/yakumo/yakumo_k.htm

小泉八雲記念館
Lafcadio Hearn Memorial Museum

Lafcadio Hearn and Greece

Other roots and inherited spirit

Patrick Lafcadio Hearn (Koizumi Yakumo) was born on June 27, 1850 on Lefkada in the Ionian Islands. He spent about two years inGreece before he moved to Dublin, Ireland, where his father Charles'family home was located. His middle name, Lafcadio, was chosen tocommemorate his birthplace. Curiously, Lefkada and Matsue sharesimilarities in scenery, as both are situated on lagoons.

Hearn and his mother, Rosa Cassimati, parted when he was four years old and never met again. However, he continued to have firm affection towards and longing for his mother as well as pride in his Greek identity. He found commonality between Japanese culture and Greek culture, featuring paganism with active ancient Greek gods and animism where even small animals have their souls. He pictured Greece as Utopia in his mind.

We planned this small exhibition this year—2009—to mark and celebrate the one hundred and tenth anniversary of the establishment of diplomatic relations between Japan and Greece. The main exhibits are the pictures of Kythira and Lefkada Islands I took when I visited Greece in September 2008. Among the exhibits are some Greek art objects donated by Mr. Takis Efstathiou to Mr. Matsuura Masataka, Mayor of Matsue City. Some of them are works by Theodoros Stamos (1922-1997), one of the exponents of Modern Greek Art, who was deeply attached to Hearn. On Kythira Island where Hearn's mother Rose was born, I was moved by the anecdotes about her handed down orally with pride by the people there. These anecdotes reflect their interests and affections for her, and are different from what are stated in the biographies.

I believe this exhibition is one small step to a new cultural exchange between Japan and Greece. We can observe how the sprit that Hearn professed was given him by Greece has had an impact on the works of the artists who came after him. We can also see possibilities of expressing his spirit and cultural background through figurative art.

Bon Koizumi

Great grandson of Lafcadio Hearn

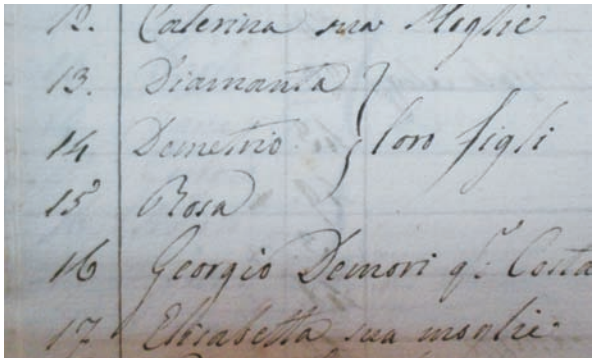
1. Kythira Island

Hearn's mother, Rosa Antonia Cassimati was born in 1823 in Kythira located in the center of Kythira Island. In April, 1848, Charles Bush Hearn came to the Fort Capsali located just across from Rosa's family house to take his post as an assistant to a military doctor in The 45th Nottingham Infantry Regiment. Before long, he fell in love with Rosa, who ardently attended the Church in the Fort. Charles was 30 years old and Rosa was 25. Hearn himself said Rosa's brother, who was against their marriage, stabbed him with a knife, but whether this was true or not is not clear. When Charles was transferred to Lefkada in June 1849, Rosa left the Island together with him.

Rosa came back to Kythira under an unstable mental condition, leaving behind four year old Lafcadio in Dublin. She remarried to a man named John Cavallini, who was of Italian descent. Their son, Angelo, became a clergyman and respected by the people there. The older generation on the island are still proud of the fact that they were baptized by him. Even though most biographies say Rosa was illiterate and emotional, according to the stories being told by the people, she enjoyed high level education at a school just down the street from her house. She was also said to have been worried about Lafcadio who she had left in Dublin. She died on Corfu Island in 1882.

Kythira Island is located off the south-eastern tip of Peloponnesus, lying at the point where the Aegean Sea meets the Ionian and Crete Seas and with the population of 3,000. There is a well known story about Aphrodite, the Goddess of beauty and love, who was born in bubbles and carried to the Kythira Island by wind. Even after the Middle Era, the island was occupied by Turkey, Venetia, France, Russia and Britain.

The house where Rosa was born. It was under renovation.



The Registration stored in the archive of Kythira. The name of Rosa (No.15), and of her brother Biamanta (No.13) and Demetoriosh (No.14) can be recognized.

Rosa's tomb. She was buried in 1882 with her remarried family.

2. Lefkada Island

Charles Bush Hearn, father of Lafcadio Hearn, moved from Kythira Island to Lefkada with Rosa in June 1849 and stayed there until February the following year. Lafcadio Hearn was born on June 27, 1850 at Lefkada in the center of the Island. It was four months after his father Charles was called back to Ireland. His middle name 'Lafcadio' means 'a native of Lefkada'. The house where Rosa was born. It was under renovation. The Registration stored in the archive of Kythira. The name of Rosa (No.15), and of her brother Biamanta (No.13) and Demetoriosh (No.14) can be recognized. Rosa's tomb. She was buried in 1882 with her remarried family.

He was baptized as a child at St. Paraskevi Church (Greek Orthodox Church). Paraskevi is the God of Eyes. Curiously, when Hearn got injured in the eye later in his life, he had sympathy with faith in Yakushi. In August of the same year when Hearn was born, his brother Robert died of febrile illness and was buried in the same Church. We can imagine Rosa spending uneasy days in an off street house with little sunshine, left alone with a small child. In August 1852, Hearn and Rosa left for

Dublin, Ireland via Marta Island to visit Charles' house, accompanied by his uncle Richard who came down from Paris.

Lefkada and Matsue share a lagoon scenery, cut off from the sea by a bund or a sand bank. Having the ocean on the west side, both landscapes tend to appear foggy. That subconscious scenery of Lefkada might explain his love for Lake Shinji.

Lefkada is the fourth biggest island in the Ionian Islands. It is connected to the mainland by a bunk road and a bridge. The population is 22,879 (2005). Like other Ionian islands, Lefkada had been occupied by Macedonia, Venetia, France, Russia and Great Britain.

3. Inherited sprit

It is said that Hearn used to draw pictures of muscles on the blank margins in notebooks. This can be interpreted to mean that he had been asking questions to himself regarding outstanding muscular beauty of ancient Greek carvings. He probably surmised that "this must be related to celestial and geometric idea on human bodies as expressed through love" (a letter addressed to Chamberlain), because this was during the era without sense of shame. He believed Greek Art was beautiful because it was not negatively influenced by Christianity. Hearn himself never failed to train his own body using 10kg dumbbells.

His affection and respect for Greece was not only about physical beauty. In his letter addressed to his brother James, he said he inherited his good features from the spirit of Greeks who had dark skin. "I love justice, hate wrong things, respect beauty and truth, trust people, both men and women, and I am blessed with sensitivity toward artistic items." All these good features came from Greek spirit. He confidently considered the sense of values he supported as a gift from Greece.

Later in his life, he wrote 'memory of a place and a magical time', 'country' and 'she was divine' in 'The dream of a summer day'. If those descriptions were fusions of his subconscious images of a Greek scenery and his mother, the core of his admiration toward Greece could be his affection toward and longing for his mother. His strong feelings toward his mother can be observed through his conclusion to a story of a ghost raising a child in Daioji Temple in Matsue as follows; A Mother's love is stronger than death.

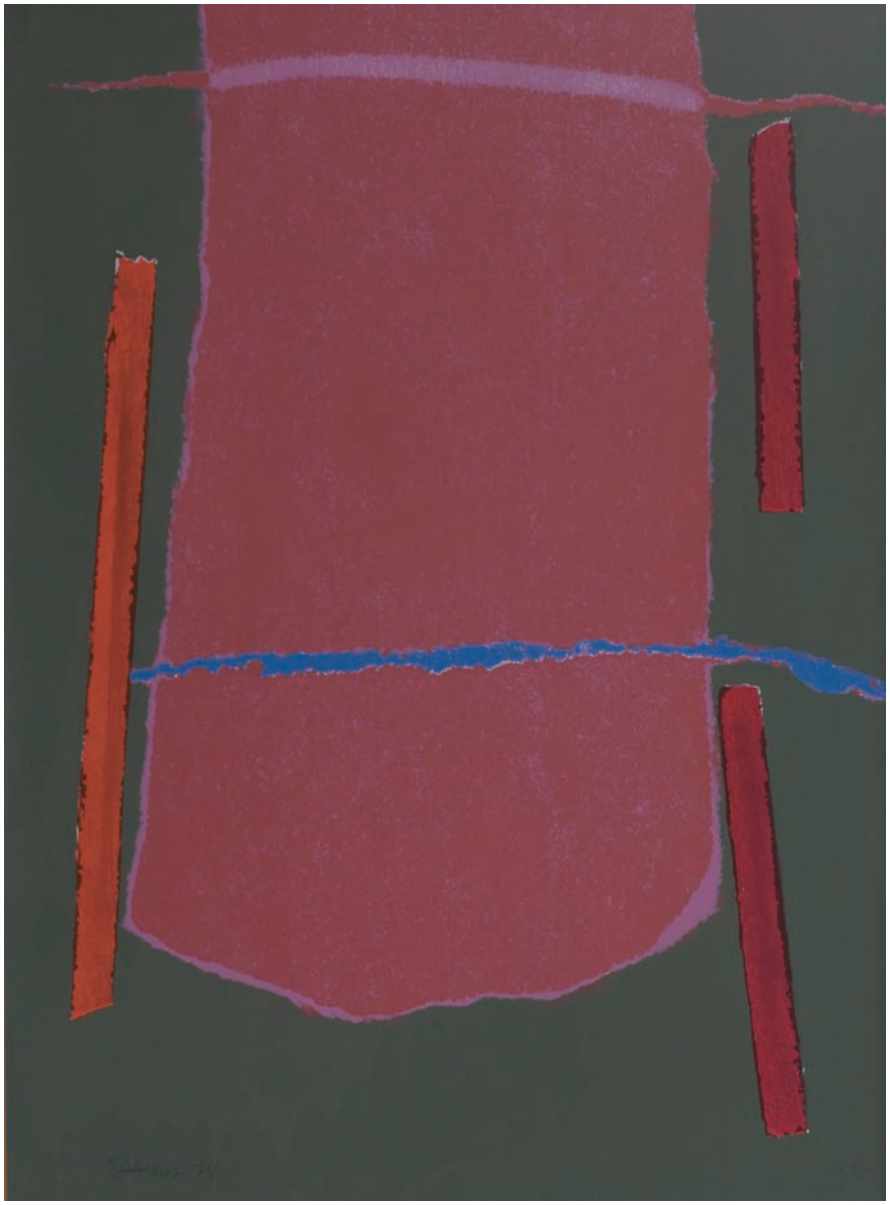
Lafcadio Hearn Street. The house where he was born is located along this path.

Later, Hearn's affection toward Greece touched the heartstrings of Theodoros Stamos, one of the exponents of Modern Greek Art. His best friend, Takis Efstathiou, as if he wished to sustain his friend's dream, has been working hard to establish cultural exchange between Greece and Japan through Hearn.

In order to inherit and re-evaluate Hearn's Greek spirit, a variety of activities are taking place or being planned including Hearn's Collection at American College in Athens, exhibitions of creative art featuring Hearn by modern Greek artists and creation of monuments to abstract Hearn's spirit by Masaaki Noda.

Explanation by Bon Koizumi

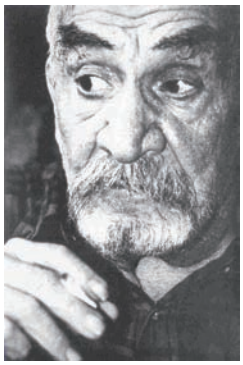
References ; O.W. Frost, *Young Hearn*, Eishiro Nishino, *Koizumi Yakumo and Europe*, Miyoko Kudo, *Island of the Holy Spirit – The Life of Lafcaio Hearn in Europe*, *Lafcadio Hearn Inclusive Edition Vol.15*, *Concerning Koizumi Yakumo*, *KYTHIRA (Complete and Up-to-date Travel Guide)*, *The dream of a summer day*



Theodoros Stamos
Infinity Field Lefkada Series *(Original: Silk screen on paper 1974)*

Athens Gallery published to the print on the occasion of his exhibition in their gallery in Athens in 1974.

98 (H) × 78 (W)
Donated by Mr. Takis Efstathiou.



Theodoros Stamos (1922-1997) was one of the original and youngest Abstract Expressionist artists working in New York City in the 1940s and 50s. He studied in 1936 at the American Artists School. From 1958 to 1975 he taught at the Black Mountain College, Cummington School of Fine Arts and the Art Students League of New York. Stamos was also a member of the Uptown Group. In late 1970s he donated many of his works to the National Gallery of Greece and the retrospective exhibition was held one year after he passed away. He is buried in Lefcada, Greece.

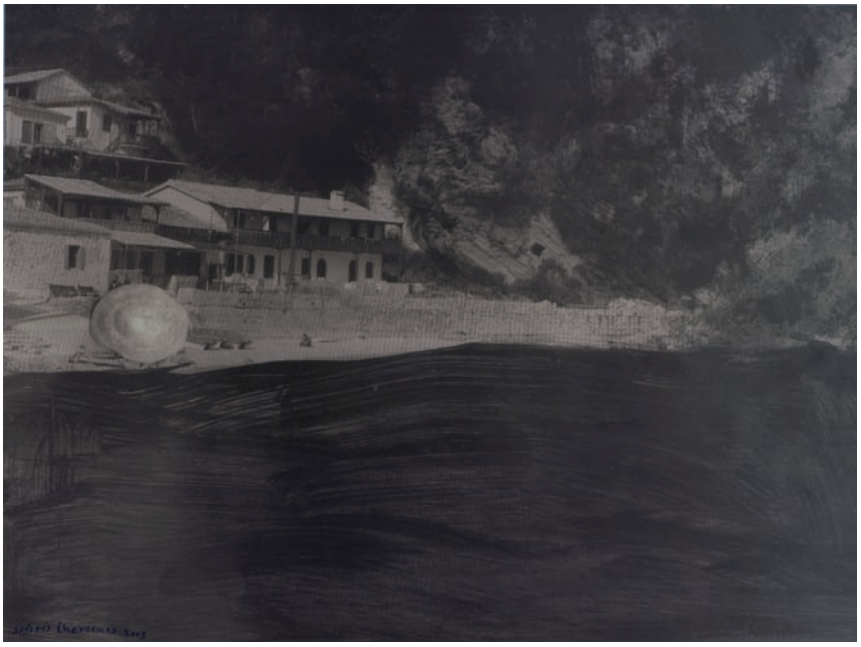
Sotiris Therianos

The Dream

After earthquake 14 Aug. 2003

He altered a photo taken immediately after the earthquake in San Nikitas by Sotiris Therianos, an artist from Lefkada.

30.4 (H) × 40 (W)
Donated by Mr. Takis Efstathiou.



John Henning

Plaque of the Parthenon frieze Plaster *(1819)*

John Henning was one of the first artists to gain access to Lord Elgin's collection of marble sculptures from Greece. Henning was struck by the beauty of the sculptures from the Paithenon frieze and asked for permission to draw and model them. Original sculpture designed by Phidias (BC480-BC430) at the British Museum what is original copy. The name of this plaster copy is Metopes of the Parthenon Cavalcade Frieze II West frieze of the Parthenon it was designed by Phidias.

40.8 (H) × 29 (W)
Donated by Mr. Takis Efstathiou.